Ⅰ 倭歌（和歌）の初出に関する瀬間正之教授の御指摘

1 『万葉集』に見える「倭歌」「和歌」

基本的には「和（こた）え歌」

・唱和・応答の歌、という意で用いられる。

・漢詩と対置される「やまとうた」ではない。

⇒「和歌」は「こたえるうた」の可能性が強い。

「倭歌」は確実に「やまとうた」と理解できる。

2 「倭歌」の可能性がある事例

巻五・八七六題詞「書殿餞酒日倭歌四首」）現行注釈書

八七六～八七九番歌の四首は、前後の歌の年紀から見て、天平二（七三〇）年頃のものと見られ、この題詞が確実に「倭歌」であれば、これが最古例ということができる。しかし、万葉集諸本には異同がある。

「和歌」西本願寺本・神宮文庫本　　『萬葉集略解札記』…「倭」は「和」の誤りか

「倭歌」広瀬本・類聚古集・紀州本・細井本

但し、巻五目録は西本願寺本「書殿餞酒日和歌四首」広瀬本「書殿餞酒歌四首」

広瀬本題詞　西本願寺本題詞　広瀬本目録　西本願寺目録　類聚古集題詞

諸本で題詞・目録に「和歌」「倭歌」「歌」と揺れがある。題詞では「和歌」とする広瀬本も目録では「歌」であり、「倭歌」の確固たる例とは断言するには躊躇せざるを得ない。

3 従来の「倭歌やまとうた」の初出説

①日本国語大辞典…この辞典は原則的として用例を初出例から挙げている。

やまとうた 【大和歌・倭歌】

(1)わが国固有の歌。多く、唐歌（からうた）に対して和歌をいう。

＊古今和歌集〔９０５～９１４〕仮名序「やまとうたは、ひとのこころをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける」

わか【和歌・倭歌】

(1)漢詩に対して、日本の歌。長歌・短歌・旋頭歌・片歌など五・七音を基調とした定型詩であるが、歌体の消長に伴って短歌が和歌を意味するようになった。漢詩に対する和歌の意識は「万葉集」の大伴家持などにすでに見られるが、歌論として明確に自覚されたのは「古今和歌集」の序文においてであろう。歌謡・連歌・俳諧・近代詩などは和歌の範囲から除外されている。やまとうた。うた。国歌。

＊源氏物語〔１００１～１４頃〕玉鬘「この和歌はつかうまつりたりとなむ思ひ給る」

②近藤信義「国風暗黒時代の和歌文化圏―「仁明天皇四十賀の長歌」からの視点―」
水門二三（勉誠出版、二〇一一年七月） 六五頁。後に近藤信義『平安朝国史和歌注考』（花鳥社、二〇二〇年）三一五頁
『続日本後紀』巻十九・仁明天皇嘉祥二（八四九）年三月庚辰（二六日）「夫倭歌之體。比興爲先。感動人情。最在茲矣。」について

「倭歌」はヤマトウタの意を明確に意識した用字である。後年の『古今集』真名序の冒頭は「夫和歌者、託其根於心地」から始まり、「和歌」なる用字が中国詩（カラウタ）に対してヤマトウタを意識化し、万葉集の「和え歌」の概念と異なる用い方と言われる。なお万葉集には「書殿餞酒日倭歌四首」（巻五・八七六題詞）とあり、「倭歌」の先例かと思われるが、平安末期の『類聚古集』に拠る修正であるので当該字例の方が先行、もしくは初出となる。

4「やまとうた」という語が選択される場面としての妥当性
古今集真名序の冒頭は「夫和歌者、託其根於心地」から始まり、「和歌」なる文字列が中国（カラウタ）に対してやまとうたを意識化しているが、仮名序・真名序とも『毛詩』大序（『詩序』詩経の序）を踏まえて、漢詩に対するやまとうたを意識した表現になっている。
八七六番歌題詞についても『万葉集攷証』岸本由豆流・文政九（一八二六）年は「ここは此餞宴の席にて、詩詠のありしなるべければ、その詩（カラウタ）にむかへて、日本(ヤマト)歌の意もて、倭歌とはいへる也」とする。これを承けて伊藤博『萬葉集釋注』三、一六三頁は、「漢詩に対する日本の歌の意。ここは、八七一前文以下の文脈の中で気取ってこういったものか。この餞宴の席で漢詩が詠まれたことに対すると見る説があるが（『攷証』）、その詩はここに載せられておらず、疑問が残る。」としている。「倭歌＝やまとうた」を採りながらも、直前に漢詩がないことは不審としている。つまり漢詩との対比がみられないこの事例で「やまとうた」であると積極的に理解する根拠は乏しいといえる。
・歌の配列などからも「和歌＝こたえうた」とする方が妥当
直前の872 番歌～874 番歌では「追和」の語が題詞に用いられている。この点から考えれば、西本願寺本目録にあるように「和する歌」、すなわち「こたへうた」としての「和歌」の可能性を捨てることはできない。八七六番題詞も本来「和歌」であり、「和する歌」「こたへうた」であったと可能性が認められる。

5 これまでの「やまとうた」の確実に古い事例
現時点で「ヤマトウタ」の確実な事例は近藤信義氏の指摘する
『続日本後紀』巻十九・仁明天皇嘉祥二（八四九）年三月庚辰（二六日）
夫倭歌之體。比興爲先。感動人情。最在茲矣。

以上から、今回の「倭歌一首」は「やまとうた」の確実な初出例・最古の例と評価できる。仮に巻五・八七六題詞が「倭歌」であったとしても、奈良時代に「倭歌」の語が既に流通していた傍証として重要である。

補足資料　（上智大学　瀬間正之）

万葉時代のウタはどう呼ばれていたか？

○『古事記』『日本書紀』は「歌」　　cf.宮町遺跡（紫香楽宮跡）墨書土器「歌一首」

①巻一・十六番歌の題詞

近江大津宮御宇天皇代［天命開別天皇諡曰天智天皇］

天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌

※持統万葉（一～五三番歌）は文武朝持統上皇の時代（六九七～七〇二年）前半に成立

②巻五・八七六題詞「書殿餞酒日倭歌四首」　　別紙参照

③巻十七・三九六七　大伴池主書簡

忽辱芳音翰苑凌雲、兼垂倭詩詞林舒錦

忽ちに芳音を辱（かたじけ）なくし、翰苑は雲を凌ぐ。兼ねて倭（やまと）詩を垂れ、詞林錦を舒ぶ。

天平十九（七四七）年三月二日　大伴池主

※倭詩は、大伴家持三九六五・三九六六の二首の短歌を指す

④歌経標式序　宝亀三（七七二）年　藤原濱成　　本文中も「歌」

臣濱成言。原夫　歌者、所以 感鬼神之幽情、慰天人之戀心者也。

※平安時代になる抄出された「歌経標式（抄本）」では、「和歌」も用いられる。

平安時代（古今集以前）の和歌（倭歌）の用例　　吉川弘文館・名著普及会の活字本

⑤『日本後紀』巻十七大同三年（八〇八）九月戊戌《十九》塙保己一本が底本

戊戌。幸神泉苑。有勅。令從五位下平群朝臣賀是麻呂作和歌曰。伊賀尓布久。賀是尓阿礼婆可。於保志万乃。乎波奈能須裏乎。布岐牟須悲太留。皇帝歎悦。即授從五位上。

⑥『続日本後紀』巻十五承和十二年（八四五）正月乙卯《八》寛文版本が底本

是日。外從五位下尾張連濱主於龍尾道上舞和風長壽樂。觀者以千數。初謂。鮎背之老。不能起居。及于垂袖赴曲。宛如少年。四座僉曰。近代未有如此者。濱主本是伶人也。時年一百十三。自作此舞。上表請舞長壽樂。表中載和歌。其詞曰。那々那義乃。美与尓万和倍貿。毛々知万利。止遠乃於支奈能。万飛多天萬川流。

⑦『続日本後紀』巻十五承和十二年（八四五）正月丁巳《十》

丁巳。天皇召尾張連濱主於清涼殿前。令舞長壽樂。舞畢。濱主即奏和歌曰。於岐那度天。和飛夜波遠良无。久左母支毛。散可由留登岐尓。伊天弓万毛天牟。天皇賞歎。左右垂涙。賜御衣一襲。令罷退。

⑧『続日本後紀』巻十九・仁明天皇嘉祥二（八四九）年三月庚辰（二六日）《廿六》

夫倭歌之體。比興爲先。感動人情。最在茲矣。

⑨『文徳実録』巻三仁寿元年（八五一）三月壬午《十》

壬午。右大臣藤原朝臣良房於東都第。延屈智行名僧。奉爲先皇。講法華經。往年先皇有聞大臣家園櫻

樹甚美。戯許大臣。以明年之春有翫其花。俄而仙駕化去。不遂遊賞。属春來花發。大臣恨日。先皇所期之春。今日是也。春來依期。仙去不歸。花是人非。不可堪悲。道俗會者莫不爲之流涕。公卿大夫或賦詩述懐。或和歌歎逝。

⑩『三代実録』巻卅七元慶四年（八八〇）五月廿八日　松下見林寛文十三年版本が底本
業平、体貌閑麗、放縦不拘。略無才学、善作倭歌。［和歌松下見林寛文十三年版本］

⑪『三代実録』巻四十二元慶六年（八八二）八月廿九日　　日本紀竟宴和歌
廿九日戊辰。於侍従局南右大臣曹司、設日本紀竟宴。先是、元慶二年二月廿五日、於宜陽殿東廂、令従五位下助教善淵朝臣愛成、読日本紀。従五位下大外記島田朝臣良臣及文章明経得業生学生遞都講。太政大臣（基経）右大臣（源多）及諸公卿並聴之。五年二月廿五日講竟。至是、申饒章之宴、親王以下五位以上畢至。抄出日本紀中聖徳帝王有名諸臣、分充太政大臣以下、預講席六位以上、各作倭歌。［和歌松下見林寛文十三年版本］自余当日探史而作之。琴歌繁会、歓飲竟景。博士及都講、賜物有差。五位以上賜内蔵寮綿。行事外記史預焉。

⑫『三代実録』巻四十八仁和元年（八八五）十月壬子朔
冬十月壬子朔。皇帝御紫宸殿、賜宴群臣。左右近衛府遞奏音楽。日暮奏和琴、作和歌。群臣具酔、極歓而罷。賜禄各有差。

天理図書館蔵本・日本後紀

古今和歌集　序　紀貫之（仮名序）九〇五～九一四年
やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。

古今和歌集　序　紀淑望（真名序）九〇五～九一四年
夫和歌者、託其根於心地、發其華於詞林者也。
それ和歌は、其の根を心地に託け、其の華を詞林に發くものなり。

土佐日記　紀貫之　九三四年頃
「かみのたちにて、あるじしのゝしりて、郎等までにものかづけたり。からうた、こゑあげていひけり。やまとうた、あるじも、まらうども、ことひともいひあへりけり。」

Ⅱ　奈良文化財研究所からの補足等

当該木簡は、平城第 621 次調査で基幹排水路ＳＤ2700 から出土した木簡。すでに『奈良文化財研究所紀要 2022』にて報告しているもので（pp152-155)、釈文・法量等については変更はない。

1　木簡の資料としての情報に関連しての補足

・時期について

出土層位は「灰色粘土１」

奈良時代前半～中頃の溝埋土を覆い、奈良時代後半に埋没する溝が掘削される。

→奈良時代中頃に堆積した土。

奈良時代中頃以前の木簡

・廃棄元について

想定される廃棄元

宮内省および被官官司

中務省および被官官司

衛府関連

これら以上の特定は難しい

2　当該木簡の位置づけについて

瀬間教授の指摘を受けた上で、確認・整理した内容は以下の通り。

・木簡では「倭歌」は初例。最古。

・確実に「やまとうた」という語が使われていた事例としては最古とみられる

※紫香楽宮の墨書土器では「歌一首」という事例があるが、「倭歌」ではない

https://www.city.koka.lg.jp/secure/5708/2008_1001_p06.pdf

・下級官人層が用いたとみられ、こうした意識・用語の広まりを見いだせる。

3　当該木簡の公開・展示について

「地下の正倉院展」後期にて展示予定。

期間：11 月 1 日（火）～11 月 13 日（日）

場所：平城宮跡資料館

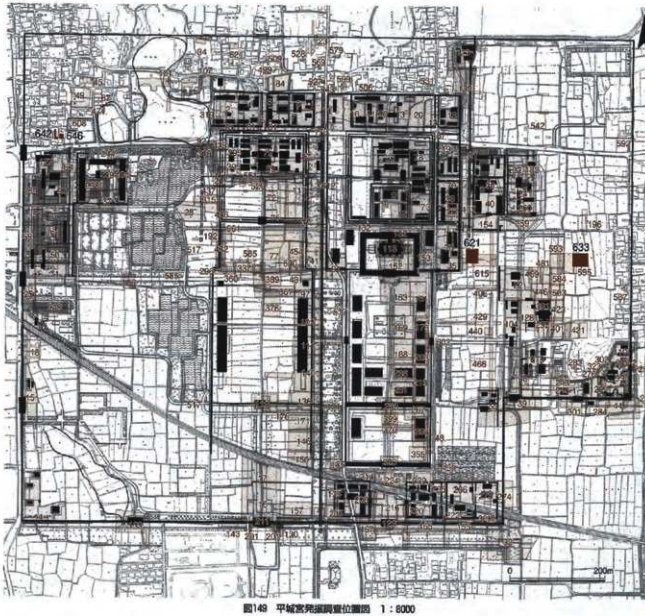


図149　平城宮発掘調査位置図　1：8000

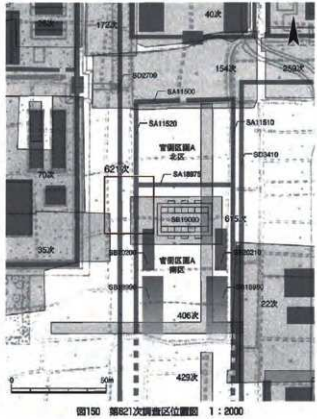


図150　第621次調査区位置図　1：2000

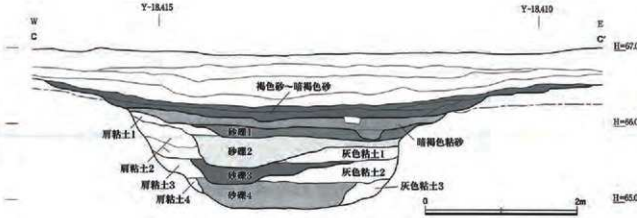
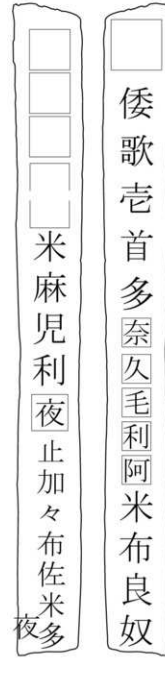
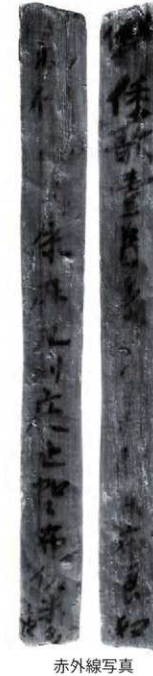


図154　SD2700断面図　1：50





赤外線写真

・□倭歌壱首多□□□□米布良奴〔奈久毛利阿カ〕
・□□□□　□米麻児利□止加々布佐米多夜〔夜カ〕

301・31・6　011　灰色粘土1

木簡釈文